

島を美しくつくる会（愛知県西尾市）

# 癒しとアートに出会う島 ～オンリーワンの島おこし～

島を美しくつくる会

副会長

みやけ ひろみ  
三宅 博巳



## 1. 佐久島の概要

島を美しくつくる会が活動する佐久島は愛知県の西尾市にあります。

知多半島と渥美半島に挟まれた波が穏やかな三河湾の真ん中あたりに位置する有人一部離島です。その面積は181ヘクタールで東京ディズニーランド約3倍の大きさとなっていて、愛知県下最大の島です。



上空からみた佐久島

地勢は標高の最も高いところで、38メートル、比較的起伏に富んだ丘陵地からなっています。

海岸線は、侵食により海食崖が発達していて、風光明媚な三河湾の島しょ景観の中心として、昭和33年4月に三河湾国定公園に指定されています。

また、佐久島の歴史は古く、侵食によって失われた石垣の地層から縄文土器の破片が発見されたり、弥生時代の貝塚、一世紀から三世紀にかけて作られた、様々な様式の弥生式土器なども確認されています。

佐久島への交通は、本土側の一色漁港から市営定期船が1日6便（繁忙期は8便）、所要時間20分程度で運航しています。

人口は、278人でそのうち65歳以上の高齢者が約半数となる136人となっています。（平成24年4月1日現在）

開発の手を逃れた多くの豊かな自然や里山など、日本の原風景が色濃く残り、コンビニエンスストアや信号機、センターラインのある道路がなく、また、人工的な音もほとんどないため、ゆったりとした時間が流

れていて、初めて訪れる方であっても、心身ともに癒される空間となっています。

## 2. 活動開始の背景・経緯 きっかけ

佐久島では、昭和22年に1,634人であった人口は、その後減少の一途を辿ります。平成7年の国勢調査では400人を割り、過疎・高齢化に悩んでいました。また、平成3年に三河湾地域リゾート整備構想の地区に指定されましたが、その開発計画が頓挫したことも重なって、島民の不安と危機感はピークに達しました。その頃、国土庁（現国土交通省）の調査委員会である「よい風が吹く島が好き女性委員会」が佐久島を視察に訪れ、開発の手を逃れた豊かな自然や景観こそが佐久島の貴重な資源であることを提唱しました。島民にとって、慣れ親しんだ普段の景色等が、外部からの調査により、活性化の資源として認められました。これをきっかけに、佐久島の自然を現代アートと融合した、これまでにない発想による島おこしが始まりました。この島おこしのために組織されたのが、島民自らの手で活性化を担う任意団体「島を美しくつくる会」です。

### ■島民主体の島おこし

「アートによる島おこし」を基軸として、島民が主体となって、佐久島固有の自然、風土、歴史、産業といった資源を発掘・研磨し、交流人口の増加など島の活性化を推進しています。

また、「島を美しくつくる会」のメンバーの多くは漁業や民宿業など生業の傍ら、佐久島を何とかしたい、という思いからボランティアとして島おこしに参加しています。

運営体制は、「ひと里」、「美食」、「漁師」、「いにしえ」の4つの分科

会が中心となって、島民自らが、イベント等を企画・立案して活動しています。

各分科会の主な活動内容は次のとおりです。

#### （1）ひと里分科会

里山に代表される景観の保全活動など

#### （2）美食分科会

佐久島の食材を利用した名物料理の開発など

#### （3）漁師分科会

魚が多く住みつく海にするため、アマモ移植による藻場の再生活動など

#### （4）いにしえ分科会

伝統・歴史の継承・保存を通じた地域文化の復興など

### ■固有資源の活用

佐久島は、開発の手から逃れたことで、幸いにも多くの自然が手付かずのまま残されています。また、黒壁の家並みや漁村集落に代表される日本の原風景などもあります。その他、伝統があり、継承され続けている和太鼓の佐久島太鼓など、佐久島にある様々なものを資源として洗い出し、島おこしの活動に活かしています。



日本の原風景と称される景観

具体的には、三河湾の黒真珠と称される黒壁の家並み景観の修復保全活動を梅園整備など里山の整備と併せたボランティアイベント「黒壁運動&里山づくり」として行ったり、歴史のある古墳、文化財等の周辺を整備するボランティアイベントや、

佐久島太鼓を一般披露する機会を設けるため、島外の太鼓チームとの太鼓競演イベント「佐久島太鼓フェスティバル」の開催など、固有資源を活かした活動は多岐にわたります。



佐久島太鼓フェスティバル

### ■黒壁運動がもたらした成果

平成15年度から続くボランティアイベント「黒壁運動&里山づくり」は当初、島民だけで行っていたものが、島外からも活動主旨に賛同する方が続々と集まるようになりました。近年は参加者が200名を越えるほどになり、資源の保全と交流の活発化が図られました。また、この活動で保持している黒壁の家並みが続く路地をはじめとする景観は、平成20年度には、朝日新聞社などによる「にほんの里百選」に選出されています。



黒壁運動の様子

### ■資源とアートの融合

島の固有資源と現代アートが、お互いを尊重しあい、融合することにより、オンリーワンの魅力を発信することを目指した「アートによる島おこし」。現在、佐久島にはアート作品が島内の至る所に常設展示されていて、スタンプラリーをしながら巡ることができます。これらのアート作品は島の固有資源と一体感のある作品となっています。

例えば、佐久島の代名詞ともいえるアート作品「おひるねハウス（平成16年製作）」は、黒壁の集落をイ

メージとしたため、黒塗りのボックス構造になっていて、黒壁の路地を通り抜けると作品に辿りつけるようになっています。こうした実際に島に足を運び体感できるアート作品をメインとして、体験思考の強い若い世代をターゲットとすることで、インターネットや口コミなどを通じて佐久島の知名度が上がり、交流人口の増加につながっています。



アート作品「おひるねハウス」

### ■行政との協働（コラボレーション）

今でこそ珍しくはありませんが、「島を美しくつくる会」は発足した平成8年度より行政との2人3脚で島おこしを行ってきました。行政には、島民の意思を尊重していただいたうえで、第三者の視点から活動に対するアドバイスをいただいたり、メディア取材や視察の対応窓口、佐久島公式ホームページの管理など情報発信に関する部分を担っていただいています。

こうした地域づくりの体制に対して、最近では行政と地域の協働で地域おこしを目指す自治体や団体からの視察が多くなりました。

### ■受賞が励みに

「島を美しくつくる会」は、平成15年度に同地域づくり表彰の会長賞を受賞しており、今回は2度目の受賞となります。

会の発足当初は、思うような成果が得られず、アートに対する意見の衝突など紆余曲折あり、向かうべき方向が見えなくなることがありながらも、島の活性化を目指して必死に進んできました。こうした活動の成果が先述の会長賞という形で認められたことは島おこしの活動にとって大きなターニングポイントとなりました。島民にとっては、大きな自信と励みになり、今までやってきたことが間違いでないことを確信するこ

とができ、現在に至るまで継続して活動することができました。

### ■交流人口の増加

「島を美しくつくる会」の地道な活動に「アートによる島おこし」の独自性が調和して、マスコミ等に佐久島が取り上げられる機会も多くなったことで、交流人口の増加という目にみえる形で島おこしの成果が現れています。

前回の地域づくり表彰の会長賞を受賞した前年の平成14年度に42,463人であった交流人口が平成23年度には約78パーセント増となる75,484人に増加しました。交流人口の増加に伴い、レンタルサイクル店やカフェ、土産店などが新設されるなど、少しずつではありますが、着実に活性化しています。



新設されたカフェ「もんぺまるけ」

### 3. 課題と展望

平成8年度の発足から16年にわたり島おこしの活動に携わってきて、交流人口の増加については、一定の成果を得ることができましたが、過疎・高齢化という課題は現在進行形で進んでいます。従って今後は、雇用の場を提供できる体制の整備などにより、若い世代を中心とした定住促進に力を入れていきたいと考えています。

最後になりますが、佐久島を訪れる方からは「初めて来たけどどこか懐かしさを感じる」という声がよく耳に届きます。これは、佐久島の豊かな自然や景観などの資源が付加価値となり、来島者に伝わっていることと認識しています。

今後も現状に甘えることなく、これらの資源を守っていくとともに、新たな資源の発掘に努めるなど、ぶれない理念をしっかりと持ち、島おこしに努めていきたいと考えています。